

辛田露伴著「努力論」岩波文庫、岩波書店 1940年2月16日刊を読む

努力とは何かを考える

1. 注意深き観察者となって世上を見渡すことは、最良の教を得る道である。
2. 失敗者を観、成功者を観、幸福者を見、不幸者を見、而してある者が如何なる線綫を手にして好運を牽き出し、ある者が如何なる線綫を手にして否運を牽き出したかを観る時は、吾人は明らかに一大教訓を得る。
3. これは即ち好運を牽き出し得べき線は、これを牽く者の掌を流血淋漓たらしめ、否運を引き出すべき線は滑膩油沢なる柔軟のものであるという事実である。
4. 即ち好運を牽き出す人は常に自己を責め、自己の掌より紅血を滴らし、而して堪え難き痛楚を忍びて、その線を牽き動かしつつ、終に重大なる体軀の好運の神を招き致すのである。
5. 何事によらず自己を責むるの精神に富み、一切の過失や齟齬や不足や不妙や、あらゆる拙なること、愚かなること、好きからぬことの原因を自己一個に帰して、決して部下を責めず、朋友を責めず、他人を咎めず、運命を咎め怨まず、ただただわが掌の皮薄くわが腕の力足らずして、好運を招き致す能わずとなし、非常の痛楚を忍びつつ努力して事に従うものは、世上の成功者において必ず認め得るの事例である。
6. けだし自ら責むるといふことほど、有力に自己の欠陥を補い行くことはなく、自己の欠陥を補い行くほど、自己をして成功者の資格を得せしむることのないのは明白な道理である。
7. また自ら責むるといふことほど、有力に他の同情を惹くことはなく、他の同情を惹くことほど、自己の事業を成功に近づけることはないのも明白な道理である。
8. 前に挙げた左岸の農夫が菽を植えて収穫を得ざりし場合に、その農夫にして運命を怨み咎むるよりも自ら責むるのが念が強く、これ我が智足らず、予想密ならずして是の如きに至れるのみ、来歳は菽をは高地に播種し、低地には高黍を作るべきのみ、というように損害の痛楚を忍びて次年の計を善くしたならば、好運は終に来らぬとは限るまい。
9. すべて古来の偉人傑士の伝記を繙いて見たならば、何人もその人々が必ず自らの責むるの人であって、人を責め他を怨むような人でないことを見出すであろうし、それからまた翻って各

種不祥の事を惹起した人の経歴を考え調べたならば、必ずその人々が自己を牽き出す人は常に自己を責むるの念に乏しくて、他を責め人を怨む心の強い人であることを見出すであろう。

- 10．否運を牽き出す人は常に自己を責めないで他人を責め怨むものである。
- 11．そして柔軟な手作りの好い線を手にして、自己の掌を痛むほどの事をもせず、容易に軽くしてかつ醜いなる否運の神を牽き出し来るのである。
- 12．自己の掌より紅血を滴らすか、滑沢柔軟のもののみを握るか。
- 13．そして柔軟な手当りの好い線を手にして、自己の掌を痛むほどの事をもせず、容易に軽くしてかつ醜なる否運の神を牽き出し来るのである。
- 14．自己の掌より紅血を滴らすか、滑沢柔軟のもののみを握るか。
- 15．この二つは、明らかに人力と運命との関係の好否を語るところの目安である。
- 16．運命のいずれかを招致せんとするものをは、思を致すべきである。

[コメント]

知る人ぞ知る辛田露伴著の「努力論」。自分の運命は自分の力で切り開く。自己責任、自助努力の教科書。良い本を岩波文庫は出版し続けてくれると感謝したい。

- 2009年6月28日林明夫記 -